

## 【俳句部門】

### ▽最優秀賞

蛇口を左にひねればきりぎりす

尚綱3年 古田 彩華

【評】初秋の中に居る作者ときりぎりす。両者の存在感が、蛇口を左にひねるという行為によって際立つ。中七までを一気に読み、一呼吸置いて下五を読む。すると、きりぎりすがクローズアップされ、その存在に気付いた瞬間の作者の姿が、ほとぼし迸る秋の水とともに見える。(西口)

### ▽優秀賞

海漂うアマクサクラゲ奴は肉食

球磨工3年 菱刈 蓮央

【評】「海漂う」も「奴は肉食」も、いかにもぞんざいな口ぶり。「アマクサクラゲ」のふてぶてしい姿がよく描かれている。(岩岡)

登校の前髪ぬらす深い霧

球磨工1年 宮本 結衣

【評】時間と闘いながら朝からセットしたのでだろう。女子高生にとって、前髪は特別。その努力が水の泡になってしまった残念さ。今を生きている高校生と、秋の霧の存在感と。球磨は霧が深い。(西口)

花火がつくる二秒間の静寂

熊本2年 久野 和香

【評】構造が、俳句という「詩」にしては無機質なところが面白い。しかし、そのことでの確に「花火」の世界をつかみとって、知的。(岩岡)

グラウンド踏まれて草の生えぬ小道

熊本2年 堀川 眞一

【評】この作者が見ている世界は、とても静かだ。句形もまた平明で静か。だが、そこには、日々グラウンドを駆けてきた高校生たちのエネルギーが充ちている。情熱を抑える静謐せひひ。その面白さ。(西口)

蛞蝓や何気なく居る同居人

芦北1年 田副 苺

【評】いのちあるもの同士がふと声をかけあう「存問」の俳句である。「何気なく居る」に、飾り気のない親しみと、一寸したユーモアがある。(岩岡)

## ▽入選

西山瑠輝(玉名工1年) 久保田葵(球磨工1年) 幡手叶佳(文徳2年) 山下颯太(文徳1年) 久野和香(熊本2年)

## ▽努力賞

林田実桜(芦北1年) 福井聖斗(盲学校1年) 松本麻里百(菊池女子3年) 松田愛(北稜3年) 中村優寿(球磨工3年) 西浦楓夏(荒尾支援3年) 齋藤菜乃葉(尚綱2年) 川端愛莉(盲学校1年)

【総評】今年は応募数は減ったが、内容で高校生らしくレベルも高く感覚も鋭い、考えさせられる佳句に出会えた。幅の広い選句ができたし、質も高かったと思う。

というのは、最優秀作品の「蛇口」の句や優秀作品の「海漂う」「蛞蝓や」「火花」などは「登校の」のようなオーソドックスな佳句に対して、視点、感覚、詠み方が新しい。「グラウンド」の句も、じっくりとよく見えて、味がある。その他の入選や努力賞の句では、「的めがけ」の句の「夏」が利いた写生句や、

「ブロック塀」の句の小さなものへの眼差、「友達と」の句の仲間意識「春野菜」の句の大胆さなど、多様で、それぞれ新鮮。

全体として、今回選ばれた句は、どれも自由。それぞれ自分の価値観や方法にしたがって、自分の世界を持っている。俳句の材料はその辺にいっぱい転がっているの、心の思うままにたくさん詠めばいい。とにかくまず、自由に表現する楽しさを体得してほしい。(岩岡中正)

高校生に「現在」はどう見えているのでしょうか。新聞、テレビ、SNSから次々と零れ落ちる不可解で不愉快なできごと。それらは、目を被い、耳を塞いでも私たちに纏わりついてきます。なす術が見つかからない、ふがない自分。現在は、『詩』からはるかに遠い時代なのです。

その中で、腐ることなく、世の中を見つめ、このよくわからないものに挑み、自分の言葉で表現しようという勇者たちがいました。しかも十七音という最小のことばで。たとえば、入選句の中の一句「ブロック塀の隙間にも夏は来ぬ」からは、鬱屈したこの時代を生きる作者の心の疼きが呟きのように聞こえてきま

した。夏の訪れを喜ぶ詩に美しいメロディを付けた懐かしい唱歌「夏は来ぬ」とは対照的な世界です。美しい世界を全身で喜ぶという体験を若い人たちに取り戻すにはどうすればいいのだろうかと考えずにはいられません。そして、その一つの手段として、俳句は意義を持つと思います。夏の課題が終わらない、というのも高校生の現在です。それを他人とは違う自分の表現にこだわって表してみる。俳句の面白さはそこにあります。おそらく、現在を生きる面白さもまた。(西口裕美子)

## 【短歌部門】

### ▽最優秀賞

先輩の最終戦の次の日に譲り受けたるバット重たし

文徳1年 松浦 大樹

【評】夏休みが終わると、部活は次学年に引き継がれる。作者は1年生だが、3年の先輩からバットを譲られた。この学校の野球部は近年強くなり県予選では決勝を争うチームになっている。それもあって、先輩が自分に託した思いもわかり、バットの重みが増したのであろう。文語を使った作品であることにも注目した。(橋元)

### ▽優秀賞

黒板にうつすら残る先生の熱意感じるチョークの跡は

熊本マリスト学園2年 合田 考太郎

【評】紙に書く場合と違って板書は案外に難しい。先生ならばお手の物でも、筆圧ならぬ白墨圧はそれぞれだろう。そこに目を止め、先生の心を推し量っているのが好い。純な心を受け止めた、敬愛の感受がまぶしい。(塚本)

マスクから白い息がふーっと出て君のまつ毛がきらきら光る

城北2年 田上 翔舞

【評】緩和されたとはいえ、マスク生活は依然として続いている。まだ不自由な生活のなか、一瞬の様子を端的に切り取って描写している。意識の動かし方が喻えれば、初霜を見るような快さに通じる。(塚本)

引退後部活三昧幕を閉じ汗をかかないめずらしい日々

熊本商3年 森田 陽菜

【評】夏を境に部活動の3年生は引退するのだろう。その生活の変化に自ら驚き、

「めずらしい日々」と素直に表現したところに直截的な感覚が籠こもっていて、共感する。この何げない感覚は貴重である（塚本）

夏休みいちばん発した言葉はねアルバイトでのいらっしやいませ

芦北2年 福田 彩来

【評】作者は夏休み中アルバイトをしたらしい。それもお店の売り子を務めたようだ。店では毎日客に向かって「いらっしやいませ」を繰り返す。「発した言葉はね」の二、三句に実感が籠こもる。「ね」での強調も成功している。（橋元）

本を買い読めば自分が主人公転生するのはこれで何回目

熊本マリスト学園2年 小田 楓華

【評】本を読むといつの間にか自分が主人公になってしまふ。そんな作者の気持ち「転生」という言葉で表現した発想が素晴らしい。本は人を生まれ変わらせる魔力を持っているのだ。（橋元）

## 入選

喜納涼香（済々黌3年）池田航生（文徳2年）恒松修（球磨工1年）澤田将基（盲学校2年）大谷侑美（菊池1年）

## 努力賞

行田侑加（菊池1年）松田翔太（玉名工1年）柴田明咲（小川工1年）永代杏奈（熊本商3年）前渕心咲（熊本マリスト学園2年）小田朱莉（済々黌2年）湯地咲綺（熊本マリスト学園2年）有田柚友（熊本商3年）吉永夕凧（文徳1年）福井聖斗（盲学校1年）

【総評】入賞作品には昨年以上に高校生らしい爽やかな作品がそろった。昨年は検定試験中の教室の緊張感を詠んだ作品が最優秀賞になったが、今年は部活に題を取った作品が最優秀賞に輝いた。これまで部活を詠んだ歌のほとんどが、がんばって優勝を目指すとかきついでと頑張るといったものだったが、今年入賞した作品は、先輩から後輩へのバトンタッチや部活が終わって汗をかかなくなった日々を不思議に思う歌など、現代の高校生の真の姿を描いたものに変わってきた。この変化の第一は先生方の指導によるものと思われるが、生徒がそれに応えるようになったためでもある。それが高校生らしい歌群となった。また、今年例年になく男子が上位に入賞したのも良かった。一部、個人で投稿した作品には現今流行している若者による幻想的な作品の影響を受けたと思われる作品もあったが、この大会では高校生らしさを大切にしていきたい。（橋元俊樹）

今の高校生はどんな生活で、何を想おもっているだろうかー、大きく時代が変わった今、そういう思いで作品を拝見したが、時代が変わろうと想いは同じなのだ、得心することができたのありがたい。

部活動、異性へのほのかな憧れ、親や先生、先輩への感謝、見果てぬ夢…日常の高校生活の中で生まれた感情を掬すくい上げ、言葉として心を表現したとき、その言葉の欠片かけらはどうなるだろうか。日常は何も想わずとも過ぎて行くが、活字となった想いは消えずに心のどこかにきつと残るだろう。活字となった作品は心の記念碑ともいうべきものになったのだと思う。

若い人よ、将来、大人になったとき、活字となったあの日のあの時の作品をぜひ思い起こしていただきたい。そのことを切に願う。(塚本諄)

## 【自由詩部門】

### ▽最優秀賞

「地球」

私が電気を消したとき  
ある国では 望まぬ争いが起き  
ある国では 住む場所が奪われ  
ある国では 家族が離れ離れになり  
ある国では 食料を求めてさまよい  
ある国では 命が軽く扱われ  
そして  
ある子供は 恐怖を知り  
ある子供は 犠牲を知り  
ある子供は 憎しみを知り  
ある子供は 孤独を知り  
ある子供は 諦めを知り  
私は頭の中の明日を疑わず  
私は昨日と同じように眠りにつく

人吉2年 永田 優

【評】「地球」という題名がいい。眠りにつく前の暗闇の中で、作者は世界の国々での惨状と、その国での子供たちの恐怖や憎しみや諦めに思いを馳はせる。最後の

二連は、声高な反戦詩以上に自他への問いかけになっている。

## ▽優秀賞

「ぼくは歌う」

ぼくは歌う

どこかの誰かの　ほとばしるような

熱い人生の歌を

どこかの誰かの　甘くて切ない

恋を描いた歌を

どこかの誰かの　突き刺さるような

悲痛な叫びを

どこかの誰かの　雲間から差す光のような

美しく尊い　人々の賛歌を

空っぽのぼくに　どこかの誰かを重ねて

自分で自分を　見失い続けて

できあがった　ぼくはだれ？

そんな問いかけに　答えられないまま　今日も

ぼくは歌う

人吉1年　山田　士道

【評】この作品の前半はふつうの出来栄えなのだが、後半が素晴らしい。「空っぽのぼくに　どこかの誰かを重ねて」以降の終連は哲学的でありながら美しい詩になり得ている。

「霽月」

月に会いたい鳥がいた

飛んでも飛んでも届かなくって

みんなは鳥をばかだと言った

月に会いたい鳥がいた

満月の夜　近くにみえた

月にはやっぱり届かなかった

月に会いたい鳥がいた

どしや降りの夜 月を探して  
つかれた鳥は地面におちた

濡れた翼がかわく頃

水たまりには光があつた

鳥がのぞいた水面には

みなも

きれいな月が浮かんでた

雨が上がった空の下

月に出会えた鳥がいた

濟々巒3年 喜納 涼香

【評】この作品は宮沢賢治の「よだかの星」やメーテルリンクの「青い鳥」などの普遍的なテーマを、鳥が月を目指すという、ファンタジー的表現で詩にできている。

「一夜の出来事」

朝鳴り止まぬ雨の音に目を覚ました僕は

その尋常ではない強さに不安を抱き

急ぎ家族の下へ向かう。

母がリビングにいることを確認し

一安心するが母の言葉で

心の奥底にあった不安が再び襲いかかってきた

「球磨川が氾濫しそうやけん役場に避難するよ」

窓の外に目をやると、家の前の道路が

すでに川のようになっていた。

母に姉や父の事を聞くと、

姉は安全に親戚の家において、

父は昨晩からずっと仕事先である役場に行っているという。

急いで身支度を済ませ車に乗り込む

避難途中川を見ると

茶色く濁り竜の如く

轟音を上げうねりながら

流木を飲み込む様に

少なからず恐怖を抱いた。

避難先である役場に着くと

すでに多くの人が不安げな表情で

一緒に来た家族や友人と話し込んでいた。

その日は不安と心配に満ちた避難所で夜を明かした。

朝ざわざわとした喧騒で目が覚め、

声が聞こえてくるのは外からだった

外へ出るともう雨は上がっていた。

人が集まっている方へ駆け寄って

皆が見ている方へ目をやって

僕は言葉を失った。

そこは自分が住んでいた村とは思えないほど

無惨な光景が広がっていた。

僕はただ轟々と流れる川を眺めることしかできなかつた。

球磨中央2年 松舟 空

【評】球磨川氾濫の夜の出来事を、抑制的なタッチで描写している「写生詩」である。それは体験を風化させない行為でありつつ、自身の言葉による乗り越えや蘇生の試みのようにも感じる。

「しろいそら」

見つかるワケないよな

シロく広いそこには、限りのないソラがある

埋まらないし、生まれもないよ

0をかけても、0でわっても

見えてるハズないよな

まっシロで、無機質でカラっぽな空白

染まらないし、育だたないよ

0をたしても、0でひいても

シロくて広くて限りのないソラを

まっシロで無機質なカラっぽを

埋めてみようよ、生んでみようよ

0にかけてさ、0をわってさ

染めてみようよ、育だててみようよ

0にたしてさ、0からひいてさ

一人でも独りではないよ

少しずつ空白に想いを垂すと

シロに色が広がって、シロじやなくなるけれど

代わったように変わってないんだよ

快晴のように、曇りのように

夕焼けのように、星夜のように

カラっぽに想いが溢れてまたソラができる



自分のソラと あの子のソラ  
自分のシロと あいつのシロ  
同じ空白は一つもないから  
だからこそ 空白は君の原点なんだよ  
なんにでもなれるよ  
だって、まっシロでカラっぽだから  
空白に当てはめてみよう  
方法や選択肢は一つじゃないから  
きつとみつかる君だけの空白

鎮西2年 中山 天聖

【評】この詩は饒舌じょうぜつなようで、人間の心の本質に迫る面白さに満ちている。  
とくに「空白」をポジティブな原点として捉えている若々しさに共感する。

「心」

なぜ 人の心は傷ついてしまうのだろう  
それは多分  
他人と比べてしまっているからだろう  
なぜ 人は他人と比べようとするのだろう  
それは多分  
自分にできないことをできる人への  
うらやましさからくることなのだろう  
でもこれが原因で  
できない自分を低くみてしまう  
そして自分は無価値だと考え  
深く傷ついてしまう

人は誰かと比べるのではなく  
昔の自分と比べるべきだろう  
そしたら  
ありのままの自分の力を  
引き出せるようになるだろう  
その力が出せたとき  
自分の心に希望が生まれ  
そして次第に  
心の傷が癒えていくのではないだろうか

反面 人は人と比べることで  
自分を高く見せたいという欲を  
生み出すこともあるだろう  
人の心は複雑だ

だから 人と比べるのではなく  
昔の自分と比べよう  
そうすることで  
心が傷つくこともなくなり  
自分のペースでやりたいことを  
頑張れるようになるのだと思う

それが一番よい選択なのだろう

盲学校2年 黒木 俐玖

【評】他人ではなく過去の自分と比べる、という思想を、言葉ではなく生き方にしたいとの態度が伝わってくる。「だろう」という終わり方で、自分の正義を押し付けない態度にも好感が持てる。

### ▽入選

立場日菜（球磨中央2年）佐藤結（人吉1年）高濱菜々子（鎮西2年）亀田来実（文徳1年）米岡沙希（人吉2年）

### ▽努力賞

高山心陽（人吉2年）長口美羽（芦北1年）村上媛愛（小川工1年）小田朱莉（済々黌2年）佐伯真綾（球磨中央2年）尾方佳穂（人吉1年）迫田さくら（人吉2年）上村彩寧（人吉1年）渕本麗愛（芦北1年）

【総評】高校生の自由詩を読むと、いつも忘れていた大切な何かを思い起こす得難い機会になる。詩は未完成でも、随所に驚きや発見が瑞々しく言語化されてい

るからだ。それは自ずとこの世界の戦禍や自然災害を自分事として受け止める態度につながり、日常を、奇跡や感謝として表現する作品が多かった半面、大人社会への疑問や拒否も鋭く表現されていた。入選作以上は紙一重で選考には苦勞させられた。最優秀作は自分の日常と戦禍や災害に明け暮れる国々と、子どもたちを淡々と描いていて、「地球」という題名が作品のスケールを大きくしていた。豪雨の記憶を冷静に形象化した「一夜の出来事」や「あの日の」や「またね」は言葉によって自分の未来を描き直す試みのように感じた。また、自分や他者への切迫した問いかけにもハッとさせられる。例えば「空っぽのぼくに どこかの

誰かを重ね」や「空白は君の原点」などという洞察は、存外自我の本質の一部を言い当てている気がした。(内田良介)

## 【肥後狂句部門】

### ▽最優秀賞

今青春 振られた友と河川敷

熊本工2年 白鳥 太智

【評】告白したがダメだったのか、交際していたけれど終わってしまったのか、友人の心は傷ついている。あなたはかけがえのない友と二人、黙って河川敷に座り川面を眺めているのでしょうか。大人になっても、この時と情景は二人の心に残っていることでしょう。(下田)

### ▽優秀賞

責任重大 最後のチャンス決める俺

熊本工2年 國武 真央

【評】最後で責任のあるチャンスならさぞ緊張することだろう。自分を叱咤<sup>しった</sup>激励し、チャンスに立ち向かう心の中を句にした。「がんばれ俺」の表現が斬新でおもしろい。(鳴神)

責任重大 ゆっくり運ぶ試験管

熊本商3年 田中 和都

【評】実験は予想し、実験・観察し結果を得る。グループですることが多いから、試験管の液体をこぼしてもしたら大変。皆に迷惑をかける。さあ、集中して始めましょう(下田)

間に合わん 回るチェーンと垂れる汗

熊本工2年 池田 皇雅

【評】何とかして間に合いたいと必死にこぐ自転車。ペダルを全力で踏み込んでいる姿を、回るチェーンと表現したところに作者の光るセンスを感じます。(下田)

責任重大 大人のすごさ知った今

熊本商1年 小佐井 響

【評】成人年齢が引き下げられ、大人への仲間入りが早まった。近づく大人への不安と大人の大変さ、すごさを感じたようだ。大人への自覚が読み取れる頼もしい句となった。(鳴神)

間に合わん 終わらん課題終わる夏

城北3年 柏 龍之介

【評】夏を楽しんだ分、苦しみが待っていたようだ。終わらないものと、終わる

ものを対比させることで句を成立させ、さらに作者の焦りをうまく表現することができた。(鳴神)

## ▽入選

澤田将基(盲学校2年) 横田真実(はばたき高等支援1年) 糸原茉優里(球磨工3年) 東優希(球磨中央1年) 金澤慶侑(黒石原支援1年)

## ▽努力賞

野田茉莉(球磨中央1年) 和田優駿(城北1年) 山下純弥(芦北2年) 平川俐衣奈(球磨中央1年) 藤本一倅(熊本工2年) 高野綺音(熊本工2年) 野中咲良(球磨中央2年) 松原優吏奈(熊本商1年) 渡邊萌侃(城北3年) 古澤奏多(熊本商3年)

【総評】昨年よりも多くの応募ありがとうございます。また基本的ルールもずいぶん守られていてうれしく感じています。さて、句を作る上で大事なことは笠の意味を理解し、笠に合うように七・五と付け句をする(続ける)ことです。笠を説明しても面白い句にはなりませんし、笠に合っていないも当たり前のこと言つては、「だから何?」となります。例えば、

間に合わん 目覚まし合わせそのうた  
は、「間に合わん」の説明です。そこで

間に合わん 目覚まし時計にらみつけ

とした方が面白くなります。

今青春 顔はニキビの花盛り

悪くはない句ですが、

今青春 顎のニキビは誰だろか

と思われニキビを想像させる句にするともっと面白い句になります。もう一捻<sup>ひね</sup>りが肥後狂句を楽しいものにします。どうです、続けてみる気にはなりませんか。(鳴神景勝)

今年の応募は2034句。昨年より283句増え、作品も字余り、字足らずの句が減ったことはうれしい現象でした。

肥後狂句は熊本特有の「笠」付けの短文芸です。出題Ⅱ笠の下に生活の中で使う日常語、話し言葉で見たこと、感じたことを付け句します。句は十二音を厳守。後は自由です。

残念なことに、今回も笠を中七や下五に置いた句がありました。「笠」は必ず頭に持つてくること。これと字余り、字足らずの句は選考の対象になりませんので呉々も注意してください。

合句（人と全く同じ）や類句（人と場面や切り口が同じ）にならないように、日々の生活の中で見る、聞く、感じることを多方面から作句し、その句が笠に合っているか、基本の約束事をちゃんと守れているか、提出前にもう一度チェックしてみてください。そうすることで気付きがあって、いい句に生まれ変わることもあります。

年ごとに少しずつレベルアップしている若者らしい皆さんの句を楽しみに待っています。（下田民子）